

IDCJ International Development Center of Japan 国際開発センター

友人を通じてみるタンザニアのソーシャル・ネットワーク —タンザニアのダメモトと日本のシンセツ—

「センムさんにバカって（本人の名前の発音が似ていることもあるが）よくおこられたよね。」タンザニア人の長年の友人ムバガは今でも日本で働いていた15年前のことを流暢な日本語で話してくれます。ムバガは1995年に日本に入国し、その後5年間、東京都足立区内の小さな染物工場で働いていました。いわゆる不法就労です。当時は東京下町の工場は人手不足で、どこかの工場でもこうした不法就労者が労働力の担い手になっていました。染物工場のセンムさんはいつも不機嫌で、何度も殴られたと当時の苦労話を話してくれますが、反面嬉しそうに「まわりのニホンジンはいつもシンセツだったよ。タンザニアでは、オネガイしてもシンセツにされないよ。」と最後にいつもの口癖を聞かされます。

ムバガの出身国タンザニアの人の気質を表現するのに良く使われる言葉が「ダメモト（ダメでもともと）」です。94年に協力隊員としてタンザニアに赴任して以来、仕事で頻繁にタンザニアを訪れますが、いつもこのダメモトには閉口させられます。私が日本人とわかると初対面でも「中古車を輸入したい」、「パソコンを買ってこい」、「デジカメが欲しい」などタンザニア人のダメモトは枚挙にいとまがありません。協力隊当時、私の学生だったムバガが「日本に行きたいので文字を教えてください」という依頼もダメモトのひとつだと思っていましたが、私がたまたま手元にあったひらがなの練習帳をあげたのがきっかけで、彼との交友が始まりました。

ダメモトの話をもう少しすると、タンザニア人（他のアフリカの発展途上国も同じかもしれませんが）は元来他人への依存体質があるのか、自分で努力して何かを獲得するよりも、既に獲得した他人から施しを受けようとする、あるいは施しを受けることにそれほど抵抗がないようです。以前、農業経済学でアフリカの農民が効率性を考えて水稲よりも陸稲を選ぶ傾向にある（収穫量は高いものの手

間とお金がかかる水稲よりも、天災等の影響を考慮して手間とお金のかからない陸稲を選ぶ）と教えられたことがあります。タンザニアの依存体質も案外効率性（自分で努力して得るよりも他人からの施しを受けられる確率が高い）の賜物なのかもしれません。あるいはタンザニアでは努力した人が成功を収めるといったサクセス・ストーリーがない（少ない）ことが依存体質の一因なのかもしれません。



市議会にて宣誓するムバガ



法科大学の卒業式（左がムバガ）

さて、5年間の不法就労を終えてタンザニアに帰国したムバガは一念発起して政治家を目指します。まずは法律の勉強をするためにナイロビの法科大学の通信教育で学位を取得します。その後タンザニアの政権政党の党員となり、政治家や政党の選挙・政治活動といった下働きを経て、地元選挙区のユース委員に選出されます。彼の活動実績が認められて政党の公認を得るとともに、2010年にタンザニアの主都ダルエスサラーム市の市議会議員選に立候補の後、見事に当選し、現在、議員として活躍しています。

「タンザニアジンはオンバオンバ（スワヒリ語で「他人からの施し」）ばかりだからね。タンザニアもニホンのようにホントにこまっているヒトにシゼンとシンセツにするクニにしないとね。」他人の施しに依存する社会でなく、ムバガのように自ら努力して成功を収めることができる社会、その成功の一部が本当に支援を必要としている人に還元される社会になれば、この国も変わっていくことでしょう。（この記事を執筆中に東日本大震災が起きました。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。「震災で混乱する中、暴動もなく、救援所でじっと救援物資を待つ日本人の姿に感動した」と海外メディアが伝えています。ムバガ曰く「ヒトにシゼンとシンセツにするクニ」は捨てたものではありません。）

（文責：IDCJ主任研究員 高橋君成）